広報 くびき 12
平成九年十二月一日発行（毎月1日発行）四一一号　発行／黒埼町役場　〒九五〇-二一　新潟県西蒲原郡黒埼町大野二八四三-一　電話／〇二五-三七七-二一〇一　編集／企画商工課（担当・広報統計係）　印刷／小野塚印刷㈱　経費一部六十五円

黒埼町の人々

第188回　執筆　宮田栄門

新聞からたどる黒埼の歴史（五十九）

双葉山、羽黒山から大相撲大野巡業まで

第二回大相撲大野興業には、力道山や初代・若乃花が訪れた。

（先月号からの続き）

また、昔八区にあった料理屋時田屋の二男・佐藤功さん（昭和十四年生）も、「私がまだ七、八歳のころ（昭和二十二年頃）、家に大きなお相撲さんが泊まった。名前は不動岩といったように記憶しているが、とても大きな足で、まな板のような下駄をはいていた。お昼ごろになって、諏訪神社の相撲場へお母さんが、家に泊まっているお相撲さんたちの昼食を入れたおはちを持って行くとき、ついて行ったことを覚えている。また、修業が苦しかったのか、下っぱの相撲とりが陰で泣いているのを兄弟子が、励ましているのを見たことがある」と話しており、二人のいう不動という相撲とりの名は符合するように思われる。

また、勧進元・浅妻長市さんの長男・長光さん（大正十四年生）も、「この勧進帳に力士の名が書いていないのでまったく残念だが、たしか柏戸、不動岩一行というのではなかったかと思う」と言っている。

戦後二回目の大相撲大野興業

大野の相撲好きの人たちの間に、前記、昭和二十二年の大相撲大野興業のほかに、記録には残っていないが、たしか、もう一回大相撲が大野へ来ているという説がある。しかし、どうした訳か昭和二十二年の興業に来た力士の名は忘れたが、二回目興業の力士の名を覚えている人が多い。それは、二回目に来た力士の中に、当時さほど知られていなかったが、後に相撲からプロレスに転じ、一躍有名となったあの力道山や、大野へは平幕で来たが　後に横綱となり日本相撲協会の理事長を務めた初代・若乃花などの著名力士がいたからだろうか。

とにかく、戦後間もない大野に、大相撲が二回も巡業に来ていることは間違いなく、これは、町の小さな相撲史でもあり、相撲ファンのためにもなんとかまとめてみようと思った。

まず、どこから手を付けたらと迷ったが、今から五十年前の黒埼村には、百人前後の力士の宿泊施設がなかったことから、大野の料理屋がこれに協力して力士を泊めたと聞き、早速取材に訪れることにした。ところが、戦後の昭和二十四、五年頃、新潟の奥座敷として華やかに栄えていた大野町の料理屋も、時代の流れとともにそのほとんどが転廃業し、また、五十年の歳月の流れに、当時活躍していた料理屋のご主人や、おかみさんの大半が亡くなり、皆、二代目の人たちに変わっている。そして、料理屋の子として育ったその人たちも、すでに還暦を迎え、また、迎えようとしており、その小さい時に見たお相撲さんの思い出や、当時芸妓さんだった人たちの思い出話、相撲ファンの人々からの聞き取り取材に入った。

二回目興業は昭和二十五年か

「人間の記憶ほどあてにならないものはない」と前に書いたことがあるが、まさにその通りだと思う。過ぎ去った僅か五十年にして、相撲興業の年月をめぐって、それは二十四年、二十五年、二十六年と諸説紛々。また、中には一回しか記憶にないという人もいる。しかし、筆者は二回説をとり、何を手がかりにしたらと考えた時、思い浮かんだのが、あの有名な力道山のことだった。

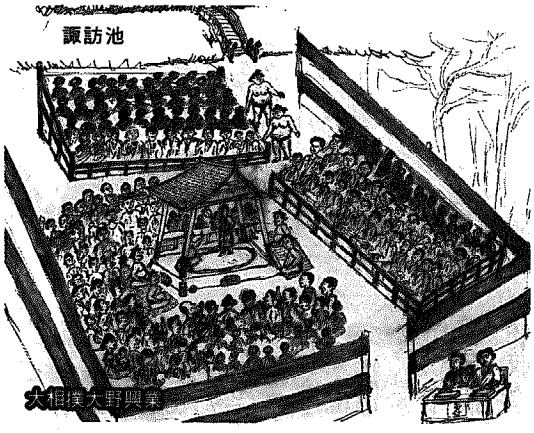
ここで力道山のことを少し紹介しよう。力道山は力士名であり、関脇・力道山として現役にあった時はあまり知られていなかった。この人が有名になったのは、相撲界を引退しプロレスラーになってからであるが、戦前生まれの者なら誰もが、「ヒアー」、「ウワッー」とテレビのリング上を見上げて歓声を揚げさせられたものである。

あの敗戦下の苦しい生活苦と、何一つ楽しみのない日本国民に、リングの上で戦勝国のプロレスラーを空手チョップで片っ端からやっつけ、敗戦以来のうっぷんを晴らし、溜飲をさげさせてくれた、あのプロレスの王者、力道山を誰もが忘れないだろう。

実は、その力道山が最高位関脇の時、二回目の大相撲興業に大野へ来ているというのである。関脇の時に来たということも、みんなの意見が一致しており、力道山の小結から関脇に昇進した時から引退までの記録を記してみる。

◎昭和二十四年一月場所八勝五敗で同年五月場所関脇に昇進。この五月場所前に力道山は肺臓ジストマにかかり二ケ月入院、全快しない内に五月場所に出る。結果は三勝十二敗。大きく負け越し関脇から前頭二枚目に落ちた。

◎昭和二十五年一月場所小結にカムバックし、十勝五敗で、同年五月場所再び西の関脇に昇進し、大関の地位が見えてきた。しかし、同年九月十一日未明、力道山は自宅の台所で包丁で力士の命ともいえる髷を切り落とし相撲界から引退。これは日本相撲史上にない断髪式を自らの手で行った。

前記、力道山の記録によると、昭和二十四年五月場所、関脇に昇進したが、その場所前から病気にかかり、直らない内に五月場所に出場して大きく負け越し、前頭二枚目に落ちた。同年十月場所に勝ち越し、昭和二十五年一月場所小結になり十勝五敗で同年五月場所再び関脇になった。そして、同年九月十一日未明、力道山は髷を切るという前代未聞の断髪式をしたのである。

（続く）